

## 特集：校歌

### 校歌の原曲版再刊行について

河野 和雄

東洋英和女学院校歌の原曲版が昨年(2015年)11月、初版から81年ぶりに再び刊行された。この年は奇しくも作曲家山田耕筰の没後50年でもあった。以下はその経緯についての報告である。文中、敬称は誠に不本意ではあるが省略させていただくことをお許しいただきたい。

#### 「東洋英和女学校校歌」の制定

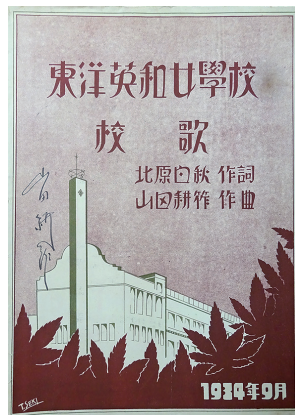
東洋英和女学院校歌は1934(昭和9)年、学院創立五十周年の年に「東洋英和女学校校歌」として制定された。当時の校長、ミス・ハミルトンのもと、北原白秋が作詞、山田耕筰が作曲した校歌は新しく完成したマーガレット・クレイグ記念講堂で行われた創立五十周年記念祝賀式で披露された。制定に關しての経緯は当時の国語科教諭、鶴沼幸が『東洋英和女学院七十年誌』に書いた記事から詳しく知ることができる。学校の標語「敬神奉仕」を敷衍した格調高い歌詞と変化に富んだ流麗なメロディーを持ち、女声三部合唱の形で書かれた芸術的香りの高い校歌は英和生、卒業生、そして英和に連なるすべての人にとっての「誇り」となっている。

「19. Sep. 1934」の日付のある山田耕筰の自筆楽譜は現在、日本近代音楽館(明治学院大学図書館付属)に所蔵されている。『東洋英和女学院120年史』にも掲載されているが、薄い鉛筆書きの繊細な筆致で書かれた譜面のいたるところにあるクレッシェンド、デクレッシェンドなどの細かい強弱指示、微妙なテンポの変化、細かいペダル指示、また数箇所伴奏左手につけられた通常より少し長めのスラー、16小節目にある休符を含んだスラーなどから、作曲者が表情豊かに流れる曲想を求めていたことを読み取ることができる。また18小節に添えられているオシヤ譜(演奏の困難な場合、部分的に替えてもよい譜)も珍しい。これは「かえでよ かえでの」のg<sup>♯</sup>音(ソ)が高すぎる場合、代わりにe<sup>♯</sup>(ミ)でもよいように和音の配置を変えた

楽譜である。多分斉唱でこのように歌われたことはないと思われるが、合唱で歌う場合にはこの音が加わっても差し支えない。

#### 「校歌」の編曲

一昨年(2014年)の夏前、卒業生の鹿島田章子から「現在歌われている校歌は、原曲とかなり違っている」との指摘があった。武蔵野音楽大学の講師も務めた同姉は初版と現在使用されている版を比較し、相違を明らかにした詳細なレポートを学院に提出された。初版を使って歌っていた卒業生の何人かからも「校歌をオリジナルに戻してほしい」との要望が学院に寄せられた。これを受けて、深町正信院長の指示のもとに校歌に関する委員会が編成された。委員長は吾妻國年副院長、委員は武田ゆり中上部音楽科教諭、山内桜子小学部教諭、河野和雄学院オルガニストであった。数回の委員会で、調査、対策について協議がなされ、早速、資料の収集、卒業生への聞き取り調査、東光会の協力によるアンケート(一部の学年のみ)などが始められた。



東洋英和女学校校歌 初版 表紙

2015年4月までに出版された校歌の楽譜は次の4種類である。

- 1 初版 1934年9月(ト長調、Gと略す)
- 2 編曲版(ヘ長調、Fと略す)1955年中学部入学者より使用
- 3 編曲版(F)「東洋英和の歌」付 1966年
- 4 編曲版(G)「東洋英和の歌」付 1973年

2以降の版に編曲者名、また編曲の経緯についての記載はなかった。しかし学院史料室に移管されたものの未登録であった書類「富岡正男先生の遺された楽譜など」の中から、表紙にM.Tomiokaのサインがある初版譜に赤鉛筆で囲んだ伴奏音の補足（17、19、22、31小節の4箇所）、及び2節、3節の歌詞の楽譜への書き込み、その他速度記号の補足のある楽譜が発見されたことから、この編曲は1952年から1972年まで中学部・高等部に音楽科教諭として在任した富岡正男の手になるものと推測された。



19小節伴奏部

これらの書き込みは、後に出版された楽譜とも違い、その準備段階のものと思われる。さらに卒業生の話などから、1955年頃富岡は中高生の歌いやすさを考慮して原曲のト長調をヘ長調に移調したことが推定されるに至った。

富岡の長女で卒業生、またピアノ科の主任を務めた丸山もと子のお話によれば、かつて大学で山田の授業を受けた富岡は、この変更について許可を受けるために山田の自宅を訪ねた。おそろおそろお伺いをたてたところ山田の返事は予想に反して「ああ、いいですよ」のような気軽な調子であったこと、また夫人からも歓待を受けたとの事である。この話は後年、父正男から直接聞いたと丸山は語っている。

本稿ではこのヘ長調版をTF版、後にト長調に戻された編曲版をTG版と呼ぶことにする。移調と同時にいくつかの修正が加えられた。

### 低音の扱い

移調により低すぎることになったアルトパート、特に冒頭4小節にわたるf（ファ）の保続音は割愛された。（参照 p.3 A）

同様に22小節、「椎よ樫よともに」の部分のa（ラ）の保続音も割愛された。これらの部分ではアルトは原曲のメゾのパートを歌い、メゾはソプラノと共にメロディーをユニゾンで歌うこととなった。この結果、これらの部分は実質2声部となり、原曲のどっしりと安定した響き

は失われるが、反面女声合唱らしい軽やかさを持つこととなった。

その他、8小節6拍目、17小節9拍目、18小節1拍目、27小節1、2拍目の5箇所では、アルトおよびメゾの音を上げて和音は開離配置から密集配置に直された。結果的に女声合唱らしい響きを与える変更とも言える。（参照 B）

### 和声の変更

18小節の「かえでよ」に相当する箇所の和音がそれぞれ変更された。原曲では3拍目のソプラノとアルト（伴奏パートではソプラノとバス）の経過的な音をはさんで同じ和音であるので、静止した安定感のある和声となっている。

これに対し編曲では、メゾ、アルトパートに動きが与えられ、変化のある、少しおおげさに言えば色彩的な和声となった。（参照 C）

なおこの18小節4拍目の和音変更により伴奏のソプラノとアルトパートに禁則の連続8度が生ずるが、休符を挟んでいるので実質的には連続した感じは緩和されている。

TG版では伴奏18小節4拍目のテノール<譜例中の\*印>はd'（レ）音でタイで1拍目からつながれている。一見原曲と同じように戻されたように見えるが、TF版からの移調ミスと思われる。d'音では合唱アルトパートとの間で不協和音が生じる。TG版で伴奏する際にはこの音はe'（ミ）に直して演奏すべきである。

### 伴奏への音の追加

17、19、22の各小節ではフレーズの終わりで歌のパートが音を延ばす時、左手の分散和音を4拍目以降にも追加し、伴奏に感じられる空白感を埋めた。これは山田自身が11小節目で行っている手法を他の場所でも応用したとも言える。（参照 D）

31小節4拍目、最後の主和音に第3音<TG版ではh'（シ）>を加えている。これは左手の分散和音の動きが4拍目に最終音を期待することによるのであろう。原曲ではそれが実質的には右手和音の一番低い音g''（ソ）となり、分散和音の最終音と1オクターブの開きがあるため最終音を欠く印象があり、これを補ったものと思われる。（参照 E）

### 伴奏リズムの装飾

23、24小節の左手バスパート1～3拍目では、原曲の8分音符の同音反復は、付点を付けられ弾んだリズムに装飾されている。（参照 F）

原曲

編曲

5小節6拍目以下 (以下5.6~と略す)

A

かぜにそよぐうつくしきもの

かぜにそよぐうつくしきもの

B

27.9~

とうようーえい わ

とうようーえい わ

C

17.9~

かえでよかえで

I V<sub>2</sub> (III)\* V<sub>3</sub><sup>4</sup> \* は経過的な和音

かえでよかえで

連続8度

I V<sub>2</sub> I<sub>6</sub> II<sub>7</sub> TG版ではd'(レ) 移調の際のミス?

D

17.1~

E

31.1~

F

22.12~

このリズムは前述の追加された分散和音（19、22小節）の中にも見られる。

### 楽譜の変更の推移

これらの変更についても富岡と山田の面談の際に話があったかどうかということについては大変興味あることである。著作権法上、著作者人格権の中の「同一性保持権」により作曲者の意に反した編曲は禁止されている。丸山の話から大変良好であったと思われる両者の関係の中で、専門家であった富岡がこれらの変更の件についても了解を求めたとも十分推測できるが、今となつては確かめる術はない。

著作権法は1899（明治32）年に制定された。その後、時代の要請、技術の発展などを受けて1970年に全面的に改訂された。この改訂は条文数では約3倍、総文字数では10倍以上の大改訂であった。旧法においても「著作者人格権」は規定されていたが、富岡が編曲を行った1955年当時のわが国では、近年とは違いあまりこれを意識する風潮はなかったのではないかと。また編曲の可否については作曲者の寛容さによるところが大きい。山田の場合はどうであったのだろう。しかし仮に山田の了解があったとしても、出版譜には編曲についてのことわりが記載されるべきであったであろう。

その後TF版は、創立80周年（1964年）を記念して富岡により作曲された「東洋英和の歌」と共に合本として出版された。1973年頃、再びト長調に移調され、TG版として2015年にいたるまで版を重ねて使用された。ト長調に戻された理由は不明である。卒業生の中には「持っている譜面はへ長調であるがト長調で伴奏されていて違和感があった」、「ある年から突然ト長調で伴奏するよういわれて戸惑った」などの感想を持った者もいたようである。

この際、新たな版が起こされたが、TF版の誤り、12小節3拍目、伴奏バス音e（ミ）のb欠落は訂正されたが、あらたに前述の18小節4

拍目、伴奏テノール音の誤り、および26小節6拍目、右手の和音の上から2番目の音が誤って書かれるという事態が生じた。fis"（ファ#）音は正しくはg"（ソ）である。これは移調、あるいは浄書の際の誤りと考えられる。

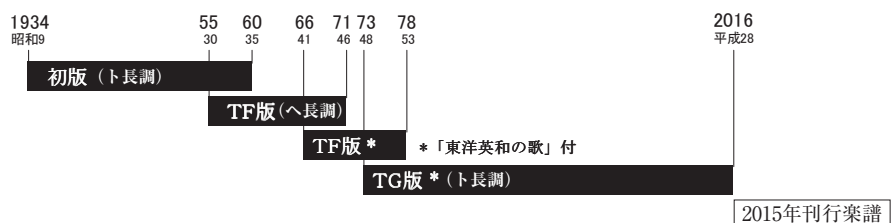
検討委員会はなお数回の委員会を重ね、再び自筆楽譜から版を起した原曲版と、60年以上歌われてきた富岡による編曲版を併せて掲載した校歌の楽譜を新たに刊行することを決定した。この際、原曲版は実用的利便性を考慮して旧仮名遣いを現代の仮名遣いに直すことも検討されたが、歴史的価値を尊重してあえてそのままにした。また山田自身の記譜ミス（13小節。すでにTF版で修正済み）、通常つけるべき注意喚起のための変化記号の欠落などを修正した。編曲版は再び編曲当初の調子、へ長調に戻した。

### 編曲の理解

編曲版をどう評価するかは、意見の分かれるところである。もちろん原作は創作物であるが故にその価値に勝るものはない。ましてや一流の作曲家の作品に手を入れることは勇気のいることである。富岡の編曲の第一義的な理由は音域の問題であったのであろう。しかし富岡の編曲は生徒の歌い易さという実際的な目的を超えて、富岡独自の音楽的脚色により、新しい魅力を作り出していると言えるのでないか。原作の格調高さに対して、より身近な親しみ易さということかも知れない。

愛される曲は後に多様に編曲されることが多い。古典の名曲の多くは後にさまざまな形に編曲されている。ヘンデルの「メサイア」も作曲された時代においても、演奏される場所、演奏者の条件により作曲者自身により様々に編曲された。モーツァルトが彼の時代のオーケストラに合わせて編曲した「モーツァルト版メサイア」も一時は演奏の主流であった。最近では作曲された時代の演奏スタイルを重んじる傾向が強く

### 校歌楽譜 各版の使用時期



なったが、現在でもなお使用される場合がある。バッハの作品も極端な場合はジャズにまで編曲されることがある。良し悪しはともかく、その作品にはそれだけ時代やジャンルを超えた普遍性を持っているのである。バッハ自身も晩年、青年時代に作曲した作品、特にオルガン曲について再度推敲し校訂版を出版した。もし山田が晩年に30年前に作曲したこの校歌を再度校訂したとしたらそれは初版と同じ物であっただろうか、あるいは何らかの変更もあったのであろうかと想像の翼は広がる。

## 結び

現在、学院の諸行事において全員で歌う校歌は高さを考慮してへ長調で歌われることが一般的である。近年は中学部合唱コンクールの中1課題曲、毎年高三が卒業時に録音するCDにもTF版が使われている。これに対して1959年の創立七十五周年記念のレコード以来今日まで何回か行われたレコード、CD録音では編曲版が

ト長調で演奏されているものが多い。興味深いのは1973年にTG版が出版される以前の録音でも編曲版ではあるがト長調で歌われている。今回新楽譜の刊行と共に、中高部合唱部により原曲、編曲両版による校歌の合唱が録音され、幼稚園から大学まで各部にちなんだ歌を加えて、CD「楓よ 楓の園」として刊行された。

筆者は初版を見たことはあったが、今回初めて調性以外にも多くの相違があることを知った。長年英和に在職しながら、このことに気付かなかった不明を恥じるとともに、指摘して下さった卒業生各位に心から感謝するものである。この二つの版をどのように使用するかは今後の課題であるが、歌う機会の状況に応じて使い分けるのが現実的ではないか。オリジナルの価値を十分に認識した上で、原曲のとおり歌うのはもちろん、原曲版をへ長調で、あるいは富岡版をト長調で歌うのも許す、そのような柔軟性をもってこの美しい校歌が今後も末永く愛され、歌い続けられてゆくことを願うものである。

## これまでに録音された校歌のレコード、CD

| 年                 | タイトル                               | 形態            | 備考                               |
|-------------------|------------------------------------|---------------|----------------------------------|
| 1959              | 「東洋英和女学院校歌」<br>創立75周年記念            | レコード<br>(EP盤) | 合唱：高等部生徒<br>伴奏にオルガンが加えられている      |
| 1971              | 「TOYO EIWA JOGAKUIN」<br>1971年度卒業記念 | レコード<br>(EP盤) | 合唱：高等部三年生                        |
| 1984              | 「風にそよぐ美しきもの」<br>創立100周年記念          | レコード<br>(LP盤) | 合唱：短期大学聖歌隊                       |
| 1984              | 「東洋英和女学院校歌」<br>創立100周年記念           | レコード<br>(EP盤) | 合唱：短期大学聖歌隊                       |
| 1993              | 「名門女子高校校歌集」                        | CD            | 合唱：高等部生徒 東芝EMI制作                 |
| 1993              | 「東洋英和女学院校歌」<br>大学第1回生卒業記念          | CD (ミニ)       | 合唱：高等部生徒 音源は上記東芝版<br>ハンドベル演奏版も収録 |
| 1999<br>～<br>2002 | 「東洋英和女学院校歌」<br>高等部卒業記念             | CD (ミニ)       | 合唱：高等部三年生                        |
| 2002              | 「東洋英和女学院校歌」                        | CD (ミニ)       | 音源は東芝版                           |
| 2003<br>～<br>2016 | 「風にそよぐうつくしきもの」<br>高等部卒業記念          | CD            | 合唱：高等部三年生<br>2004年までト長調、以降へ長調    |
| 2005              | 「東洋英和女学院校歌・<br>東洋英和女学院大学歌」         | CD (ミニ)       | 音源は東芝版                           |
| 2016              | 「楓よ 楓の園」                           | CD            | 校歌合唱：中高部合唱部<br>原曲版、編曲版を収録        |

## ＜追記：あれこれ＞

### 楽譜通りでない歌い方

「このまど」、「かべ」、「にわ」の傍点の音にフェルマータ（音を延ばす印）はつけられていない。「少しゆっくり」の指示があるが、付点4分音符分延ばしてゆったりと歌われるのが習慣になっている。その方が大きな2拍子の拍子感が崩れず、自然に感じられるからであろうか。

### 白秋自筆原稿の修正

北原白秋の自筆原稿はインクで書かれているが、最後の「東洋英和、東洋英和」の部分は、3節ともアルファベットでTE TE TE と3回も書かれている。しかしこの部分は鉛筆でうすく消され、日本語で「東洋英和、東洋英和」とこれもうすく直されている。直したのは誰だろう。曲のおさまりは2回が適当で、3回ではおさまりが悪い。耕筈からの提案であったのか、それとも白秋みづからの訂正であったのか。

### 「東の道」の解釈

筆者は中高部在任中、毎年高三の音楽テストの一部に、校歌の歌詞の意味について出題した。「日かげ織る」、「光と新たなる」、「にほへよこの良き土」、「玉よりも響かふ愛」など文学的かつ文語調の歌詞は、中1以来何回か意味を教わっているはずである。この類は採点対象としたが、第3節の「東の道」については採点はせずにそれぞれに自由な解釈を書いてもらった。

多かった解釈、珍答。

「東の道」→「東の言葉」→「東の国で話されている言葉」→「英語」の連想から「英語が話されている学校」。確かに日本で見ると世界地図では、カナダは日本の右、すなわち東にある。しかし英語は西洋の言葉というのではないか。

「道」という字にひかれて「東の道」は「学校の前の通り」であると地図入りの解答もあった。鳥居坂通りは学校の東ではなく西側にある。

無理もない。筆者も一言で明快な説明はできず、関連ある事柄を羅列し、それぞれに連想を広げてもらうだけであった。

「東」、太陽の上る方向、明るくなる、物事の始まり、真理の源、啓蒙、オリエンテーション、東の博士、「はる」という読み方もある・・・

「道」、字からは人のみち（倫）、読み方からは、神のみ言葉、「はじめに言葉があった」（ヨハネ福音書）、フォーレ作曲「ラシーヌの賛歌」の冒頭の歌詞「至高者と同一なる言葉よ」（キリスト賛歌）、中国語では「道」という字に「言う」という意味もある・・・等々

二名の方の解釈を紹介したい。

### ・黒川信也元高等部長の解釈

楓の園には、人間が最も大切にしなければならない、「わたしはどのように生きるか」を教えてくださいとされる神の御言葉が示されている。

### ・今井亮二中高部国語科教諭の解釈

東洋英和は、互いに相手のことを思いやり、そして想いや時間を共有し、それをみなと一緒に積み重ねていくような、豊かな出会いのある学舎である。

### 校章の変遷

初版楽譜の裏表紙にある校章は楓の葉の根元の部分が曲がっている。1984年、創立100周年を機に校章の正用定型が制定されたが、それまではさまざまな形の楓マークが種々の出版物などで使われていた。校章の変遷を調査した元大学教授、伊勢紀美子は「史料室だより」に寄せた文を次のように結んでいる。

「当時の校長ハミルトン先生は、合理的で簡潔を好まれると共に鷹揚であって、大筋にOKを出されると、一切責任者に委かせて仔細に及ばずであった方という。根本のカナダ楓が確認されている限りにおいて、その一時的、表層的形状の崩れをも内に抱擁して来た校章の歴史は、ひとりの人格が時の流れ方をも支配し、伝統という言葉に置換えられうるものと教えてくれた。」(No.7 1979年)

校歌の変遷とも関係があるような気がする。

### 「富」と「冨」

富岡正男の「富」は「冨」が正式な字であるが、学院在職時は「冨」が使われていたことから本稿では「冨」を使用することとした。先生は晩年は「冨」が使われていたようだ。

### 校歌についての記事など

1935年 「同窓会会報 母校創立五十年記念号」

1954年 鶴沼幸『東洋英和女学院七十年誌』

2013年 今井亮仁「論叢」第31号

資料「東洋英和女学院 校歌について」

### 校歌を主題とした楽曲

1971年 長尾壽晃（元短期大学教授）

東洋英和女学院校歌の主題による変奏曲

197?年 田中友子（卒業生・作曲家）

東洋英和女学院校歌による変奏曲

（学院オルガニスト 元中高部音楽科教諭）

# 校歌に刻み込まれた歴史と伝統

渡辺 裕

## 共同体歌としての校歌

音楽のもっている重要な役割のひとつに、共同体を形づくったり維持したりするというものがある。コンサート・ホールなどで、浮世の雑念を忘れて純粋に楽しむことは、もちろん音楽の醍醐味の一つだが、現実の社会の中で人々が声を揃えて歌うことで連帯を確かめ合い、アイデンティティ意識を強めてゆくこともまた、音楽の重要な機能である。もっぱらそのような目的で作られる歌は、しばしば「共同体歌(コミュニティ・ソング)」などと呼ばれるが、校歌はその典型的なものである。日本では、とりわけ昭和戦前期に多くの学校が次々と校歌を制定し、どの学校にも校歌があるという、世界的にも珍しい文化が形作られてきた。

狭い意味での校歌だけでなく、小学校で歌われる唱歌、女学生たちの歌う愛唱歌など、ふつうの音楽作品とはまた一味違う、さまざまな共同体歌のおりなす学校の音楽の世界は、日本人の共同体意識や心性を形作る上で大きな役割を果たしてきた。東洋英和女学校校歌は、校歌制定の動きが全国的に最も活発化した時期である1934年に、その先頭に立って多くの校歌、社歌、自治体歌などを作っていた北原白秋、山田耕筰という「黄金コンビ」が手がけた、この種の共同体歌の典型と言える作品であると同時に、それらの中でもとりわけ質の高いものの一つである。

## 共同体歌をめぐる「原典」問題

こうした珠玉のような作品であれば、原典をそのままの姿で残したいと考えるのは当然のことである。近年はとりわけ、「原典尊重」が叫ばれ、作曲家の自筆楽譜などの信頼できる資料をもとに校訂された「原典版」楽譜が重視される時代である。その意味では今回、山田の自筆楽譜の精査をふまえた原曲版の楽譜があらためて刊行されたことは、時宜にかなったことと言えるだろう。

他方で、共同体歌のような、人々に愛唱され、歌い継がれてきた曲の場合には、いささか厄介な問題もある。滝廉太郎の作曲した《荒城の月》

にある、原曲では半音下がりだった「春高樓のはなのえん」の「え」の音が、全音下がりの形になって広まったり、ブラームスの《子守唄》のリズムの付点がとれてしまい単純化された形で広まったりするなど、作曲家の残した原典とは違った形で人口に膾炙しているケースが少なくないのである。

それらの場合、原曲より改変された形の方が自然で歌いやすいなど、もしそういう形に変えられていなければ、あれほど広く人々に愛されるようにはならなかったかもしれないと思わされることが多い。《荒城の月》の音の変更のケースは、作曲者の死後、山田耕筰が手を加えたものであることが知られているが、このように歌う人々の感覚に合わせた変更が意識的に行われることも少なくない。こうしたケースでは、改変のもたらした効果の重みや広がりを見ると、原曲を尊重して元に戻すのが良いと、一概に決めるわけにはいかなくなってくる。

今回のケースでも、編曲者の富岡正男が行ったへ長調への移調は、音が高すぎるための歌いにくさを解消するという理由であろうし、その他の変更も、最小限の変更でさらなる輝きを加えることに成功したもので、その意味では、共同体歌によくある事例のひとつであると言って良い。山田自身、率先して滝廉太郎の《荒城の月》の改変に関わっていることから窺えるように、共同体歌特有のこのような問題をよく理解していた。山田はベルリンに留学して西洋の最先端の現代音楽を取り込むような仕事の一方で、民衆が声を揃えて皆で歌えるような「国民音楽」の樹立を自らの重要な使命と考えていた。あれほど多くの校歌を手がけたのもまた、そういう使命感ゆえのことであり、富岡の加えた改変について、山田が単に了解したという以上の積極的な賛意を示したとしても決して不思議ではない。

## 複数の「正しい歌い方」

共同体歌のこうした特殊事情に限らず、最近の音楽研究では、楽譜や演奏法の「正しさ」に関わる考え方全体が大きく変化してきている。

音楽というものが、楽譜に書かれた時点で完成するのではなく、さまざまな「現場」でさまざまな人が関わってはじめて実際に音になる「生もの」である以上、楽譜はプランの一部にすぎないとも言える。作曲者自身、自分が現場に立って演奏する機会があれば、演奏者の技量、ホールの音響等々、さまざまな要素を考慮して改変を加えたであろうことは想像に難くない。そういうことから、最近の楽譜校訂は、唯一の正しい「原典」を固定するというよりは、そうした多様な可能性をできる限り勘案するような方向に向かってきている。

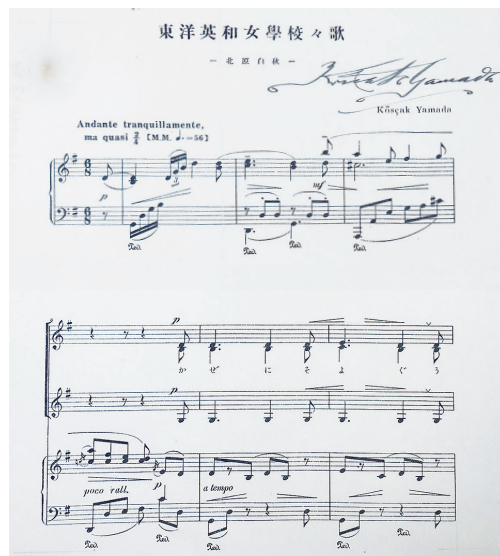
特に共同体歌の場合、多様な伝承の場があり、それぞれに応じた歌い方の「伝統」が形作られていることも多い。有名な北大寮歌《都ぞ弥生》は、寮歌集編纂の過程で何度も作曲者に問い合わせるなど綿密な楽譜の校訂が行われてきた一方で、入学式できいた歌い方と、その当時寮で行われていた、「一息二文字」などと呼ばれるおそろしくゆっくりした歌い方があまりに異なるので新入生が仰天したといった一口話を生

み出したりもしてきた。しかしその多様なあり方は、その曲が形作ってきた歴史や伝統の深みの現れと考えるべきであって、無理にどれか一つの「正しい」ものに統一することは、そうした深みや厚みを失わせることにもなりかねない。その意味では今回、東洋英和女学院校歌の楽譜やCDが「原曲版」と「編曲版」とを並置する形で編纂されたことは、まことに理にかなった措置と思われる。それは、この校歌が多くの人々の手で守り育てられてきた誇るべき歴史であると同時に、その上に立って、将来さらに第三、第四の新しいあり方が生み出されてゆく、そんな可能性の広がりを感じさせてくれるのである。

### プロフィール

渡辺 裕 (わたなべ ひろし)

東京大学大学院人文社会系研究科教授 (美学芸術学、文化資源学)。専門は聴覚文化論、音楽社会史。著書に『聴衆の誕生』(中公文庫)、『日本文化モダン・ラブソディ』(春秋社)、『歌う国民』(中公新書)など。



上 : 初版楽譜 1 ページ 山田耕筰サイン入り

右上 : 「東洋英和女学院校歌」 創立75周年記念レコード (1959年)

右中 : 「東洋英和女学院校歌」 創立100周年記念レコード (1984年)

右下 : 「楓よ楓の園」 CD (2016年 3月)



## 〈思い出の先生がた〉31 黒田成子先生

### 黒田成子先生との出会い、そして学んだもの

片山 知子

眼鏡の奥の眼差しの優しさ、ウェーブのかかった髪の毛、お茶目な投げキッスのパフォーマンス。六本木の短期大学時代、そこで出会った黒田先生のイメージを挙げるとこのようなのだと思います。

授業では優しい口調で時には熱意を込めて、子どもの遊びの場面でのいろいろな姿、そこに関わる保育者のあり方を教えられました。社会性、喧嘩をめぐる受け止め方、カリキュラムの是非などどれも興味深く、自分が保育者になったらどうするかなと思いつめながら授業を受けていました。保育学の基本原理やフレーベルについての基礎知識も。

ところが呑気な学生だった私は期末試験の時、大変な失敗をします。いくつかの言葉が挙げられその意味を問う出題でした。「ガーベ」と書かれており、それを見た私はいわゆる頭が真っ白の状態に。フレーベルの保育遊具である恩物のドイツ語でした。他の学友は難なく回答したといいます。いつ聞いたの？と聞くと涼しい顔で「先生がおっしゃっていた」と。私は恩物については歴史的な古い遊具だと理解し、あまり関心も持たない学生だったのです。

キリスト教保育は子どもの遊びを大事にする保育として実践の歴史を積み重ねてきました。私は「東洋英和の保育」を学び、それをいくつかの保育現場で実践してきました。そこでは常に変わらない保育を共有できる基盤がありました。何々方式というような保育方法ではない、ごく普通の日常的な子どもとの生活、遊びを大事にしようという意識です。

それは何を根拠にして伝えられてきたのか、改めて興味を持ち、たどり着いたのが黒田先生の保育論でした。そこでこの数年、先生の数多いご研究の実績や資料を調べています。

黒田先生はキリスト教保育を戦後の東洋英和の新制短期大学において晩学されました。

卒業後直ぐに送り出されたアメリカ留学で世界の最先端の保育学、キリスト教を学ばれ、帰国後は東洋英和だけでなく、日本の保育学研究への情報発信者として功績を残されました。先生の保育学研究は常に実践を伴うものであること、何よりキリスト教信仰に基き、そして今を生きる子どもに向き合おうとする姿勢でもあ



黒田成子先生

りました。

私は短大卒業後、短期大学附属かえで幼稚園で保育者としての歩みを許されました。そこでは黒田先生から保育の現実課題としてキリスト教保育についての園内研修のご指導を受けたことも懐かしく思います。聖書の示す私たちへの神様からのメッセージを子どもに伝えることの大切さ、そして同時に子どもの生活の中に存在し、生じる様々な事柄をキリスト教の価値観でどのように受け入れて関わるかを小さな事例、エピソードを通して考える学びでした。

不肖の教え子である私は、今回この原稿を書きながら、先生のチャーミングな仕草を思い返し、黒田先生は常に神様に対してご自分を心から委ねる、正直な生き方を表現されていたのだと気付かされました。感謝です。

(キリスト教保育連盟理事長

1972年高、1974年短期大学保育科卒)

#### 黒田成子(くろだせいこ)先生 略歴

1914年10月11日生まれ

1936年 同志社女子専門学校卒業

1952年 東洋英和女学院短期大学保育科卒業

1954年 WMSの留学生としてアメリカのナショナル・カレッジ・オブ・エデュケーション大学院修了

本学短期大学に奉職、東洋英和幼稚園主任、保育科長、学長事務取扱を歴任  
勤続 25年間 (～1980年)

キリスト教保育連盟理事長、日本保育学会名誉会員、武蔵野相愛幼稚園園長・理事長

2007年5月24日 永眠(享年92歳)

## 〈資料紹介〉 28

### 松岡正樹氏寄贈 いまずわせい 今諏訪勢以所蔵古写真

酒井 ふみよ

ここに紹介する古写真群は、昨年9月と10月に、関西在住の研究者の松岡正樹氏により寄贈された、今諏訪勢以先生の所蔵写真である。

全127枚中ほとんどが写真館で撮影された人物のポートレートで、厚紙の台紙に貼られたものやカバーのついたものばかりで保存状態は大変良い。

ここでまず今諏訪先生について紹介しておきたい。先生はクリスチャンであった父親の願いにより、1885年すなわち本校創立翌年に甲府から上京して給費生として入学、1893年まで在学、1年間静岡英和女学校に派遣され、戻ってきて翌年卒業。1897年まで寄宿舎取締り、その後教員として訳読、初級英語クラス、聖書、唱歌などを担当した。そのほかにも日曜学校の先生、王女会運営の恵風学校校長も務めた。その間ずっと英和の寄宿舎が彼女の家であり、寄宿生たちと共に暮らしていた。とても誠実な人柄で誰からも信頼が厚かった。1922年に京都の上島家に後妻として嫁ぐために退職、その後は関西の同窓会の要となり、1932年に亡くなった。彼女については、『東洋英和女学校五十年史』のみならず、同窓会会報、ミス・カートメルの回想にも記述されており、初期の東洋英和女学校を支えた献身的な人物であった。

このように彼女が「麻布女学校の子」（ミス・カートメルの表現）であったことが良くわかるのが、この写真群である。

大きく分けると、ご本人およびご家族の写真が13枚、宣教師など西洋人のものが32枚、日本人の教師たちのものが7枚、それに対し、教え子と思われる生徒・同窓生たちおよびその家族の写真が73枚ある。

同窓生たちが贈った写真は、一人で写ったものの、数人のグループのもの、結婚の報告と思われる伴侶とのもの、出産報告と思われる赤ちゃん、子どもの成長、一家全員のものなどパターンはいろいろである。先生を敬愛する生徒はまず卒業の時、それから結婚や出産の慶びの報告の時に写真をさし上げたのであろう。先生と同窓生の絆の強さがうかがわれる。中には、1枚の若い青年の写真の裏に、彼の生年月日と死亡年月日が記されており、息子を亡くした悲しみのお便りが寄せられたことが推察される。

宣教師の先生は数年ごとに1年間の賜暇休暇があったので、別れを意識して写真を渡す機会は多かったであろう。史料室で今回初めて入手できた先生方の写真も数枚ある。カナダメソジスト教会婦人ミッション会長のW. E. ロス夫人、主任のE. ストラチャン夫人が1905年に訪日された時のポートレートもある。また、今諏訪先生と小林富子先生とは仲良しだったらしく、一緒に写ったものも何枚かある。

保存状態の良さから推測すると、今諏訪先生はこれらをきちんと箱に納めて、大事に保管しておられたのだと思われる。

全く別の視点、台紙や写真館の方から見てみると、台紙の多くが大変素敵なデザインである。また、丸木写真館（新橋）、次は荒川（芝森元町）で撮影されたものが多い。

残念ながら、裏面に献辞や撮影日は記されても、贈呈者の氏名の記述は少ない。両者にとってことさらに記す必要もなかったのであろうが、後世の我々からすればどこのどなたかわからないのは非常にもどかしいことである。

**お名前のわかる方々・・・【先生】**：ブラックモア（4枚）、クレイグ（2）、マンロー（2）、ラージ（2）、M. カックラン（2）、S. カックラン、C. E. ハート（3）、コーテス、ロバートソン、ヴィゼー、アレン、ティンバーレイク、アームストロング、ハミルトン、クロンビー、ウイントミュート、小林富子（5）、奥野みね子、小澤ふさ **【生徒】**：内田（高木）勝代（2）、内田（伊丹）小夜子（2）、生尾元子、平岩喜代子、福田x喜子、吉田x、今村寿々代（?）、内垣（浅野）泰子（浅野順一牧師夫人）、**【その他】** W. E. ロス、E. ストラチャン、和田喜八、横田ふくみ、新渡戸稲造（?）（xは読み不明）

写真以外に、1919年の創立35年記念祝賀会のプログラムと1915年の外国人教師一同のクリスマスカードが入っていた。

本学院に学び、あるいは教えた人びとの真剣な眼差しがじっとこちらを見据えている。往時の本学院の雰囲気や恩を偲ばせる貴重な写真コレクションである。幸運なことに散逸せずにまとまっていたこれらの写真をそっくり入手した上、本校に寄贈して下さった松岡正樹氏に心から感謝申し上げたい。（史料室 囑託）

1



5



2



6



3



4



7



- 1 : 今諏訪勢以
- 2 : 今諏訪勢以 (右から2人目) と小林富子 (左端)
- 3・4 : 氏名不詳
- 5の左 : 松野和平  
中央 : 鈴木静、富士枝 (明治40年)
- 6の左上 : 波多野傳四郎牧師一家  
右 : 古谷一雄一家 (明治39年)
- 7 左より : シビル・コータス、マーガレット・クレイグ、  
アニー・アレン

(以上 敬称略)

## 史料室所蔵資料の目録化作業報告

- 史料室一 7月～9月：書庫内整備（余剰資料廃棄、書籍の分類整理・再配架、逐次刊行物リスト化）、恵泉女学園史料室見学、目録セミナー参加 / 10月～3月：書庫内パネル、過去の展示資料、モノ資料の整理、不要物廃棄。逐次刊行物、行事資料の整理。史料室作成諸目録の統一方法を検討。
- 10月：所蔵目録作成委託を、出版文化社（以後S社）、紀伊國屋書店（K社）の2社に決定。S社には学内にてアーカイブ的資料の目録作成及びコンサルティング、K社には書籍と逐次刊行物の目録作成を委託する。
- 11月・12月：S社一書庫内の作業（配架移動、配架図作成）、書庫棚5・6・7の概要目録作成 K社一洋書（Lot1 含む村岡花子文庫洋書）搬出・目録作成開始
- 1月：K社一洋書作業完了・搬入（830冊）、和書（Lot2・3 一般書籍・他校年史）搬出 S社一打ちあわせ
- 2月：S社一ヴァーチカルファイルの概要目録作業開始。K社一和書（Lot2）作業完了・搬入（994冊）
- 3月：S社一ヴァーチカルファイル（1～6）の概要目録作成終了（S社 2015年度合計 2089件）。K社一和書（Lot3）作業完了・搬入（723冊）（K社 2015年度合計 2547件）。

## 主な寄贈資料

- \* 画像提供・取材協力成果物：・BS11「とことん歴史紀行」柳原白蓮（2015.7.13放映）（DVD）・キリスト教的新発見！目からうろこシリーズVol. 7 「朝のヒロインはクリスチャン」（いのちのことば社）（DVD）・『広岡浅子と日本のヒロイン』英和出版社
- \* 「東洋英和女学院 第19回 ハンドベルフェスティバル」（CD）、「Early Summer Concert 2015/5/23」（CD）、「東洋英和短期大学英文科同窓会かえで会総会（2015.6）」（DVD）
- \* 卒業記念品 楓モチーフの指輪
- \* 『八重桜の向うに一戦後70年の夏一』市村和子著（高等女学科卒）朝日新聞社（自分史）
- \* 『地平線』白蓮著 ことたま社（1956年刊）
- \* 『柳原白蓮の生涯 愛に生きた歌』河出書房新社
- \* 『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』青山学院初等部

- \* 「日本女子大学成瀬記念館所蔵 広岡浅子関連資料目録」
- \* 「恵泉女学園史料室所蔵資料目録」その2
- \* 「重要文化財 神戸女学院 ヴォーリズ建築の魅力とメッセージ」<創立140周年記念版> その他 他大学年史・紀要多数

## 購入資料

- \* 『柳原白蓮エッセイ集 ことたま』河出書房新社
- \* 『ロッキーの麓の学校から一第2次世界大戦中の日系カナダ人収容所の学校教育』フランク・モリツグ著 東信堂
- \* 『岩倉使節団とイタリア』岩倉翔子著（高等部卒）京都大学学術出版会
- \* 『不思議というには地味な話』近藤聡乃（高等部卒）ナナロク社
- \* オール英和マグカップ 2種（英和生制服イラスト 楓の会グッズ）

## 製作資料

- \* マイクロフィルムのデジタル化：Methodist Church in Canada ; *The Missionary Outlook* 9巻分、Annual Report他WMS資料9巻分

## <お知らせ>

「東洋英和女学院資料集 第4号 M. J. カートメル関係史料」（*Documentary Source Book of Toyo Eiwa Jogakuin Vol.4 M. J. Cartmell Papers*）刊行

かねてより準備してきましたミス・カートメルの資料集をようやく刊行することができました。2010年にミス・カートメルのご親戚にあたるアンステイス・ブロムさんより寄贈を受けた遺品（「史料室だより」No.79で一部紹介）と、残部が底をついていた資料集第1号（1985年刊）を再録した英文資料です。（B5版 301頁）ご希望の方に有償でお頒けします。1部2,000円+送料。お申し込みは史料室にて承ります。

## <お知らせ>

史料室では、学院の歴史や学生生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。ご家庭にあつてご不要のものがありませんでしたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の著作も収集しています。

お問合せ先は下記のとおりです。  
東洋英和女学院史料室（法人事務局内）  
Tel 03-3583-3166（直） Fax 03-3583-3329  
E-mail : archive@toyoeiwa.ac.jp